

委託事業実施内容報告書
平成28年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】

実施内容報告書

団体名：Vivaおかざき！！

1. 事業の概要

事業名称	Viva！！つながる日本語プロジェクト2.0 「多文化共生のプラットフォームとしての日本語教育体制整備事業」
事業の目的	日本語教室からの多文化共生のための地域づくりを目指す。また、外国人住民と日本人住民がともに地域参加できる環境づくりのための日本語教育体制整備事業を行う。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	<p>愛知県岡崎市では、日本語学校・大学が留学生に対する日本語教育及び日本語教師養成を行っており、ボランティア団体及び行政機関が地域に在住・在勤する外国人市民に対して日本語教育を行っている。しかしながら、事業展開の方法や経済の状況等から、その利益を享受できる外国人市民は限られており、また連携も行われていないため有機的なネットワークは機能していない。また、一部の日本語指導ボランティアは熱心なもの、その輪も一定以上に広がっていない状況であった。</p> <p>そこで、平成27年度の「市民が主役！！参加型ワークショップを通じた体制整備事業1.0」では多様な全ての人の「参加」を念頭に、地域の多文化共生に資する日本語教育のあり方を検討する市民向けのワークショップや初級者向けの生活知識と日本語能力を向上させる日本語教室、読み書き能力を育成する日本語教室、災害時に活躍できる人材育成のための日本語教室を実施した。また、活動内容をブログ、SNSを活用し盛んに発信した。市民向けのワークショップには、日本語教育関係者以外にも多くの参加があり、地域の協力してもらべき人材がいることを認識できた。「協働」や「つながる」をキーワードにセミナーも行い、日本語教育以外の分野や市外や県外からの参加も目立ち、広域的なつながり作りを実現できた。しかし一方で、市内の日本語教室の関係者の参加は少なく、多文化共生への関心が低いことが分かった。また、日本語教室における外国人市民の地域での対話と共生に繋がる活動には、市内の日本語教室関係者からの消極的な反応も多かった。また、日本語教室では、外国人住民が生活上の「心の壁」を越えて、日本語パートナーや地域の日本人市民との対話の中から日本語について自信をつけていく様子が見られた。ただ一方で、日本社会に参加するためのハードルは高く、地域とつながる自信を持てるような機会を同時に提供していくことが重要だと感じられた。</p> <p>以上から、①外国人の地域参加のための言語的・精神的なエンパワメント、②外国人の地域参加をつくる人材の育成、③外部への情報発信の強化が必要と考えられる。</p>
本事業の対象とする空白地域の状況	
事業内容の概要	<p>本事業では、日本語教育を通じた外国人市民の共生、日本人市民も外国人市民も含めた市民全体の多文化共生と日本語教育への理解不足等を、実際に地域とつながる日本語教育に関わりながら一緒に考え、課題や可能性を共有していく中で解決していくことを目標に掲げた。また、平成27年度の事業の中で市民の参加こそが地域の力であると感じたため、「地域」の日本語教育だからこそそれを活かすべきとも考え、その実現ために具体的に下記の4つの取組を行った。</p> <p>【取組1】参加型ワークショップとOJTによる日本語教育の担い手育成 岡崎市では、市の事業や行政がボランティア活動を支援する形で日本語教育が行われてきたが、「生活者としての外国人」の日本語能力向上という観点に基づく日本語学習支援は行われていない。また、日本語教育の担い手が、外国人住民を対等な市民として認め寄り添いながら日本語学習支援を行うという態度やそれを促進するような土壌も醸成されていない。本事業では、日本語教室は多様な背景を持つ人たちの言語習得や相互理解の場であり、多文化共生のための「プラットフォーム(基盤)」であると考え、それを目指した。そのためには、日本語教育のボランティアが①外国人住民を対等な市民としてとらえ、寄り添うこと、②外国人の声や様子を的確にとらえ、学習内容に反映できること、③常に学びの姿勢を忘れず自身の活動を改善できること、の3つの要素を持つことが必要だと考えた。そこで本取組では、それらを実現するために、日本語教育でのボランティアとして活動を希望する人を対象に、対等な関係づくりのために有効な市民参加型ワークショップの手法で外国人市民に必要な日本語教育を行うために何が必要か検討した。さらに実践的な日本語学習支援の能力を育成するために、OJT(On the Job Training)の手法を取り入れ、担い手育成を実施した。</p> <p>【取組2】暮らしに役立つ実践型の日本語教室(60h) 本事業では、日本語教室が多文化共生のための「プラットフォーム」となること、日本語教室が社会の中に必要不可欠なものとして位置づけられることを目指し、教室運営を行った。これらを実現するため、本事業では多文化共生の「プラットフォーム」としての日本語教室の要素を以下の3つととらえ、実際のカリキュラムデザインを行った。</p> <p>①多様な参加者を互いに認め合える ②日本語教室を通して学んだ日本語・生活知識が実生活とつながっている ③日本語教室で学ぶことによって、社会参加や自己実現が可能になる</p> <p>まず、多文化共生の実現とリアリティある日本語能力の習得を目指すため、日本語教室に日本語パートナーと呼ぶ活動・会話補助のためのボランティアを導入した。また、対話を中心とした日本語教室活動を通じ、参加者がそれぞれの背景を認め合い、多文化共生に資する教室活動を目指した。また生活に即したトピックや内容、また学習者自身が社会の一員として社会参加や自己実現が可能なテーマ設定と教室活動の内容づくりに取り組んだ。具体的な教室内容としては、①支援に役立つ日本語教室、②生活に役立つ読み書き教室の2つの教室を実施する。前者は、高齢化社会の中で外国人住民が災害時や非常時に支援者となることが期待されるという背景を考慮するとともに彼らの社会への所属感を醸成する目的で実施した。後者は、生活に役立つ読み書き能力を育成することで、学習者の社会的エンパワメントを目指した。また学習から強い要望のあった③病院に役立つ日本語教室を開催した。本取組では、上記のような教室活動の展開を通じ、プラットフォームとなる日本語教室の運営の実現に取り組む。</p>

【取組3】Viva!!つながるセミナー

愛知県では日本語教室やボランティア等の研修等が名古屋市近郊に集中しており、ノウハウの共有等が効果的に行われていない。また、日本語教授法についての研修はあるが、外国人市民の社会参加や自己実現を目指した地域との「協働」や「つながり」を意識した内容を持つ研修は少ないのが現状である。そこで、本取組では、すでに日本語教育等に取り組んでいる人を対象に地域と事業を「つながる」優良事例を知り、外国人市民と日本人市民がともに地域参加できる環境づくりのために日本語教室が地域で果たすべき役割について考えるセミナーを開催した。また、他分野(まちづくり、アート等)の地域連携の事例を知り、日本語教育に活かすという観点での講師選定・内容づくりを積極的に行った。セミナーの進め方は基本的に参加を主体とする「参加型」の手用を用い、参加者自身の活動をふりかえり、他団体の取組みからヒントを得る機会をつくることを通して、既存の支援の資質向上と広域的なネットワーキングに取組んだ。

【取組4】「つながる」日本語教育の情報発信及びツール作成

岡崎市には「生活者としての外国人」の日本語能力向上という観点に基づく日本語学習支援を行う日本語教室がなく、まだまだ外国人市民の地域参加の重要性が理解されにくい状況である。本事業の取組の成果を発信することで、日本語教室を起点とした多文化共生のための地域づくりについての理解促進を目指した。そのために、本事業の成果を報告する成果報告会を日本人市民も外国人市民も含めた一般向けに開くとともに、SNS・ブログを活用してタイムリーに広域への情報発信を行った。また、岡崎市での取組みをまとめた冊子や、記録映像などの情報発信のためのツールを作成し、広く共有した。

事業の実施期間

平成 28年 5月～平成 29年 3月 (11か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	穴井英之	岡崎市防災危機管理課
2	天野裕	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事務局長
3	伊藤弘子	岡崎市国際交流協会 会長
4	川崎直子	愛知産業大学短期大学 准教授
5	杉浦仁美	りぶらサポータークラブ 代表
6	土井佳彦	NPO法人多文化共生リソースセンター東海 代表
7	山口ルイザ	岡崎ブラジル協会
8	忠内亜倫	岡崎中国人協会
9	木俣亜美	岡崎フィリピンフィリピンコミュニティ
10	長尾晴香	Vivaおかざき!! 代表



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成28年5月17日 (火) 10:00~12:00	2時間	連尺学区市民ホーム 小会議室	穴井 英之 天野 裕 伊藤 弘子 川崎 直子 杉浦 仁美 土井 佳彦 山口 ルイザ 忠内 亜倫 木俣 亜美 長尾 晴香	議題 1. 目的・ねらいの確認 2. 実施計画について 検討内容 『Viva!! つながる日本語プロジェクト2.0「多文化共生のプラットフォームとしての日本語教育体制整備事業」』の事業計画に基づき、事業の目的、ワークショップ、日本語教室の運営の基本方針と流れ、成果報告会の計画について説明が行われて、その内容について意見交換が行われた。
2	平成28年10月15日 (日) 10:00~12:00	2時間	連尺学区市民ホーム 小会議室	穴井 英之 天野 裕 伊藤 弘子 川崎 直子 杉浦 仁美 土井 佳彦 山口 ルイザ 忠内 亜倫 木俣 亜美 長尾 晴香	議題 1. 中間報告 2. 実施計画の修正 検討内容 取組1「日本語パートナー養成講座」、取組2「支援に役立つ日本語教室」の実施状況の報告を行い、これまでの成果と課題について意見交換を行った。また、「Vivaつながるセミナー」や成果報告会、後半の日本語教室の方針について、多文化共生のプラットフォームとして何が必要かを検討した。
3	平成29年1月28日 (土) 10:00~12:00	2時間	連尺学区市民ホーム 小会議室	天野 裕 伊藤弘子 川崎 直子 杉浦仁美 長尾 晴香	議題 1. 最終報告 2. 成果と課題検討 検討内容 「Vivaつながるセミナー」、成果報告会、日本語教室の実施状況を説明し、本事業の成果をどのように地域に発信していくべきかを検討した。また、本事業の成果物として作成中の冊子の内容についても意見交換が行われた。
	平成29年1月29日 (日) 10:00~12:00	2時間	竜見ヶ丘会館	伊藤 弘子 山口 ルイザ 忠内 亜倫 木俣 亜美	

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	<p>●まちづくり・外国人当事者、草の根活動団体など多様な視点からの事業推進 平成27年度の運営委員会では、地域日本語教育のプロフェッショナルである土井佳彦氏(NPO法人多文化共生リソースセンター東海 代表)、川崎直子氏(愛知産業大学短期大学 准教授)から当団体の日本語教育活動について他地域に発信すべき事例だと言っていたが、さらに改善点をご指摘いただいた。岡崎市でまちづくりを行っている天野裕氏(NPO法人岡崎まち育てセンター・りた 事務局長)には、地域と繋がるコツなど事業運営について全体的にアドバイスをいただいた。ブラジル・中国・フィリピンの外国人コミュニティからは、運営委員以外にも多く運営委員会会議への参加を募ってもらい、外国人市民としての率直な意見を聞くことができた。また、広報活動においてもネットワークを活用して、協力してもらえた。</p> <p>一方で、専門家と外国人当事者の意見は充実していたものの、草の根で活動している団体の視点が欠如していた。そこで、長く岡崎市で国際交流・多文化共生の分野で活動している岡崎市国際交流協会の伊藤弘子氏と、市民活動団体の中間支援として活動実績があるりぶらサポータークラブの杉浦仁美氏を運営委員として選定した。また、昨年度に続き緊急時・災害時に外国人市民が支援者になるための日本語教室を実施するため、岡崎市防災危機管理課にも運営委員としてアドバイスをいただいた。</p> <p>●さまざまな機関による日本語教育連携強化 平成27年度の日本語教室では、岡崎市防災危機管理課・消防署等と連携をして実施することで、実践的でリアリティーのあるプログラム作りを行うことができた。それだけでなく、参加した外国人市民も日本人市民からも高い評価をもらった。平成28年度も引き続き、さまざまな機関と日本語教育の内容面での連携を積極的に進めていく。具体的には、日本赤十字社愛知県支部に協力を得て、より実践的な教室活動にしていくとともに、日本語教室以外でも外国人市民が地域で活躍できる機会をつくることができた。</p> <p>●外国人自助組織との連携強化 先に述べたように本事業では、昨年度に引き続き、外国人自助組織に運営委員会に関わってもらおう。当団体は、これまでの多くのイベント・事業を外国人自助組織の協力を得て運営してきた。特に広報面では、岡崎ブラジル協会、岡崎フィリピンコミュニティ、岡崎中国人協会は、常日頃から連携の体制がとれており、地域の複数の外国人キーパーソンと協力して事業推進を行ってきた。さらに平成27年度の事業を通じ、各外国人自助組織の日本語教育についての重要性を啓発することができた。また、事業運営にも多大な協力を得ることができた。そのため、本事業ではこの体制を活用し、新たな外国人支援者の発掘やエンパワメントに努めた。</p>
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	<p>①コーディネーター:長尾晴香(Vivaおかざき!!代表) ワークショップの調整・開催から日本語教室の運営など全体の取りまとめを行うとともに、事業責任者として全ての取組を概観した。</p> <p>②事業担当者: 下記のもの、コーディネーター・長尾をサポートしながら事業を担当していく。また、各取組には、補助者として関わった。 ・鈴木美帆(Vivaおかざき!!理事) ・岸本サンドラ(Vivaおかざき!!理事) ・森下裕介 鈴木はこれまで岡崎市国際交流協会の中で、国際交流にかかる市民活動を行ってきた経験があるとともに、当団体立ち上げ当初から多文化共生の普及及び日本人住民への理解促進に取り組んできた。また、外国人自助組織とのネットワークも深い。岸本は、自身が日系アルゼンチン人であること、在日期間20年以上であることから、外国人住民をリードする立場として団体に関わっている。以上2名は、こうした背景及びネットワークを活用し、本事業への協力者を募ったり、事業運営を主体的に担った。 森下は、大学に通いながら日本語教員養成講座でも勉強している経験を活かし、取組1の日本語教育の担い手育成と日本語教室の補助を担当する。本事業の日本語教室では、日本語パートナーと呼ぶ活動・会話補助のためのボランティアを導入しており、日本語講師と協力しながらボランティアのコーディネート等、日本語教室での活動をサポートした。 また、ブログ等による事業の広報も担当した。ブログ・SNS等を活用した広報の成果として、セミナーに県外や日本語教育以外の分野の参加があるなど、外部への情報発信をしっかりと行うことができた。</p> <p>③全体アドバイザー 運営委員会に加え、下記の4名についてさらに詳細な事業運営を概観していただき、相談しながら事業の効果を高めていく。 ・鈴木温子(岡崎市市民生活部市民協働推進課国際班 班長) ・土井佳彦(NPO法人多文化共生リソースセンター東海 代表) ・伊藤弘子(岡崎市国際交流協会 会長) 鈴木氏は行政の立場から既存の日本語教室との連絡・調整役となり、誤解が生じた時などに対応いただけた。土井氏は多文化共生に本事業がどう寄与していくかという視点で助言をいただき、より効果的な事業を行うことができた。 また伊藤氏には、長年岡崎市で国際交流・多文化共生に取り組まれている経験から、岡崎市の草の根活動団体や地域との関わりが強く、地域とのつながりを深めるためのアドバイスやサポートをしていただいた。</p>
----------	--

3. 各取組の報告

<取組1>

取組1	取組の名称		参加型ワークショップとOJTによる日本語教育の担い手育成						
	取組の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・下記3つの要素を持った日本語教育ボランティアの育成に取り組む。 <ul style="list-style-type: none"> ①外国人住民を対等な市民としてとらえ、寄り添うこと ②外国人の声や様子を的確にとらえ、学習内容に反映できること ③常に学びの姿勢を忘れず自身の活動を改善できること ・日本語教育に取り組むボランティアの多文化共生・国際理解の意識向上を図る 						
	取組の内容		<p>日本語教育でのボランティアとして活動を希望する人を対象に、対等な関係づくりのために有効な市民参加型ワークショップの手法で外国人市民に必要な日本語教育を行うために何が必要か検討した。さらに実践的な日本語学習支援の能力を育成するために、OJT(On the Job Training)の手法を取り入れ、担い手育成を実施した。講師としてコーチング、ファシリテーションのメソッドを持つ専門家に関わってもらい、より効果的な活動・会話補助のためのボランティア(日本語パートナー)のスキルを引き出していくことを目指した。</p> <p>第1回ワークショップ ・オリエンテーション ・目的確認 ・OJTの学ぶべき視点・心構えについて</p> <p>第2回ブレOJT ・地域日本語教室の現状確認 ・OJTの学ぶべき視点・心構えの確認</p> <p>第3回ワークショップ …外部講師:若林かおり(株式会社ナチュラル・コーチ 代表取締役) ・コミュニケーションについて ・積極的傾聴スキル ・分かりやすい話し方</p> <p>第4回ワークショップ …外部講師:千葉月香(とよた日本語学習支援システム プログラム・コーディネーター) ・発話を引き出す教室活動 ・目的、ニーズを意識した支援の姿勢 ・日本語レベル間の萌芽</p> <p>第5回OJT + ふりかえり ・ワークショップで学んだことを踏まえた実践 ・日本語教室の終了後に、自身の姿勢・対応がどうだったかふりかえる</p> <p>第6回:OJT + ふりかえり ・ワークショップで学んだことを踏まえた実践 ・日本語教室の終了後に、自身の姿勢・対応がどうだったかふりかえる</p> <p>第7回ワークショップ ・全体ふりかえり</p>						
	<input type="checkbox"/>	空白地域を含む場合、空白地域での活動							
	取組による体制整備		<ul style="list-style-type: none"> ・外国人住民を対等な市民として認め寄り添いながら日本語学習支援をできる人材の育成をすることで、日本語教育の質の向上を図る ・様々な出自の参加者をネットワーキングし、今後の日本語教育体制の整備を行う ・一般市民にも日本語教育体制に関心を持ってもらうことで、ボランティアの発掘と地域住民として多文化共生・国際理解を行ってもらう 						
	取組による日本語能力の向上		—						
	参加対象者		日本語教育・多文化共生に関心のある市民				参加者数 (内 外国人数)		26人 (0人)
	広報及び募集方法		当団体HP、SNSでの募集、既存の日本語ボランティアへの声掛け 市内の大学や日本語教員養成機関への声掛け 等						
	開催時間数		総時間 19時間 (空白地域 時間)		7回(WS:2時間×4回、OJT:4時間×3回)				
	主な連携・協働先		岡崎市役所、既存の日本語教室、ボランティア団体、大学 等						
開催場所		岡崎市図書館交流プラザりぶら、連尺学区市民ホーム 等							
参加者の出身・国別内訳 (人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
		—	—	—	—	—	—	—	—
		日本(26人)							
実施内容									
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名	
1	平成28年5月29日 (日)10:00~12:00	2	連尺学区市民ホーム	21	主旨説明と目標設定	本取組のオリエンテーションとして、主旨説明と目標設定を行った。日本語パートナーとして必要な能力は何かを考え、今後どのようなことを学んでいくべきかを考え設定した。	吉岡嗣晃	森下裕介	
2	平成28年6月12日 (日)13:30~17:30 ※日本語教室13:30~16:30、ふりかえり16:30~17:30	4	岡崎市図書館交流プラザりぶら102	20	OJTの学ぶべき視点・心構えの確認(ブレOJT)	実際に日本語教室に参加し、活動の流れやパートナーとしての役割を体験した。その後振り返りとして、自分ができることや改善すべき点、今後学んでいきたい点などを話し合い共有した。	吉岡嗣晃	—	

3	平成28年6月19日 (日)10:00~12:00	2	連尺学区市民ホーム	13	コミュニケーション、聴く力	コーチングの専門家である若林かおり氏を講師に招き、コミュニケーションの際、気をつけるべき点などをワークショップ形式で学んだ。相手が発話をしたくなる人にはどのような共通点があるのかを考え、話し合いながら今後の活動にどう生かすのかを共有した。	若林かおり	森下裕介
4	平成28年6月26日 (日)10:00~12:00	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102	13	目的、ニーズを意識した支援の姿勢	昨年、日本語講師をしていた千葉氏より教室活動がどのような意図で行われているか、講師の立場から話をしてもらった。その上で、学習者と向き合う際に、どのようなことに心がけるべきか、日本語パートナーとしての役割について考えた。	吉岡嗣晃	森下裕介
5 ※どちらかの日程に参加	平成28年6月26日 (日)13:30~17:30 ※日本語教室13:30~16:30、ふりかえり16:30~17:30	4	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102	13	ワークショップで学んだことを踏まえた実践OJT①	これまで学んだ事を踏まえ、日本語教室に参加をした。その後、活動の振り返りを行い、各自で気づいたこと、良かったことなどを話し合った。振り返りでは、自分も楽しむこと・うなずき、ジェスチャーからコミュニケーションを始めることが大切である、などの意見や、自分がしゃべりすぎない・学習者の意見を述べる時間が必要であるなどの改善するべき点が挙げられた。	吉岡嗣晃	-
	平成28年7月24日 (日)13:30~17:30 ※日本語教室13:30~16:30、ふりかえり16:30~17:30	4	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102	9		日本語教室での実践の後、振り返りを行った。やさしい日本語へ言語化する難しさ・口を出し過ぎず、必要とされたときに手助けする、などの気づきがあった。また困った点・改善すべき点では、学習者からの質問が増えてほしい・語彙(意味・漢字)が分からないときの対応などが挙げられた。	-	-
6 ※どちらかの日程に参加	平成28年7月3日 (日)13:30~17:30 ※日本語教室13:30~16:30、ふりかえり16:30~17:30	4	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102	7	ワークショップで学んだことを踏まえた実践OJT②	日本語教室での実践の後、振り返りを行った。振り返りでは、学習者の国のことを質問すると話が盛り上がる・学習者の学習意欲が高い・外国の思考方法を知ることができた、などの気づきがあった。また困った点・改善すべき点では、グループで活動を行う際の進行方法・アドバイスの仕方などが挙げられた。	吉岡嗣晃	-
	平成28年7月17日 (日)13:30~17:30 ※日本語教室13:30~16:30、ふりかえり16:30~17:30	4	連尺学区市民ホーム	11		日本語教室での実践の後、振り返りを行った。振り返りでは、学習者の知的レベルが高く、教えられることも多い・学習者が積極的に発話していた・耳を傾けることで話を引き出せる、という気づきがあった。また、困った点・改善すべき点では、他のグループの人の名前を覚えられない・日本語指導の時間が少ない、などが挙げられた。	吉岡嗣晃	-
7	平成28年7月31日 (日)10:00~12:00	2	図書館交流プラザりぶら102	13	全体ふりかえり	ワークショップと日本語教室での実践活動を通して、全体のふりかえりを行った。グループに分かれ、教室活動で日本語講師、学習者、日本語パートナーのそれぞれの立場での関わり方について考え、改めて日本語パートナーとして必要なことを話し合った。最後に、今後の日本語パートナーとしての行動宣言を行った。	吉岡嗣晃	森下裕介

(1)特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第3回、第4回 平成28年6月19日(日)、6月26日(日)】

日本語教室でのOJTの前に、ワークショップ形式で第3回目はコーチングの専門家から、第4回目は日本語講師の立場から、日本語教育に取り組むボランティアには、どのような力や知識が求められるのかを考え共有した。

具体的には、第3回目では、コーチングの基本的な考え方を学び、相手の発話を促すにはどうするべきかに注目し、会話の中で自分が相手の話を奪ってしまったり、相手にあまり話をしたくないと思われるような態度を取っていないかを考え、そこから、日本語教室で学習者と会話する際に気をつけるポイントなどをグループで話し合い、全体で共有した。

第4回目では、日本語講師がどのような目的・意図を持って、それぞれの教室活動をつくっているのかについて学び、その上で学習者の発話を引き出すために日本語パートナーとして何が出来るかを考えた。



○取組事例②

【第5回、第6回 平成28年6月26日(日)・7月24日(日)、平成28年7月3日(日)・7月17日(日)】

第3回、4回のワークショップの内容を踏まえ、第5回、6回目で「支援に役立つ日本語教室」に実際に参加をして実践OJTを行った。第5回目は講義中心の教室活動、第6回目では対話中心での教室活動に参加をして、教室終了後に参加をして感じたことなどの振り返りを行った。①気づいたこと・大切だと思ったこと②良かったこと③改善提案④その他の4点に着目し、それぞれの意見を共有した。①学習者だけではなく、自分が学ぶことも多くあった。②学習者に自信を持ってもらうことができた。③発表のアドバイスや、段取りが難しかった。④学習者が生き生きと活動する日本語教室を初めて見た。などの意見が挙げられた。振り返りを行い、他の参加者の意見を聞くことにより、今後パートナーとしてどのような姿勢で教室に参加していくのかを考える機会となった。



(2) 目標の達成状況・成果

募集20名に対して異なり数で26名の参加があり、予想以上に日本語教育や多文化共生に関心を持っている市民が多いと感じた。昨年度は養成講座は行わずに日本語パートナーを募集していたが、今年度は養成講座という形にしたことで、参加者の半分近くが新規参加者となり、未経験者でも参加しやすい環境をつくることができた。また、ワークショップで知識や心構えを学び、日本語教室でのOJTで経験を積むプログラムにしたことで、知識と経験が結びつきやすくなることになった。毎回のふりかえりの中で、「学習者から学ぶことが多かった」などの意見が出るなど、日本語パートナーが活動を通して外国人市民に寄り添い、お互いに学び合う視点に気付くことができた。

(3) 今後の改善点について

多くの市民が参加してくれたことはよかったが、実践活動を行った「支援に役立つ日本語教室」の3時間に加えて、振り返りやワークショップを行ったことで、参加者への負担が大きかった。特に午前中にワークショップがあり、午後に日本語教室で活動を行う日は、両方の参加が難しいという人が多くいた。また、OJTに指定していない日程の日本語教室に参加する日本語パートナーが少ない傾向があり、OJTを行う日程を多くして、参加する日を事前に調整しておくなど、改善が必要だと感じた。また、ワークショップの中で、日本語講師がどのような意図で教室活動をつくっているのかを考える機会をつくったが、なかなか1回のワークショップだけでは難しく、日本語教室後の振り返りの中でも、ワークシートや活動内容についての疑問が出るがあった。今後もワークショップなどで、全体像を学ぶ機会をつくるとともに、授業の前後で活動の意味や目的を日本語パートナーと共有する必要性を感じた。

＜取組2-1＞

取組2-1	取組の名称	暮らしに役立つ実践型の日本語教室① 支援に役立つ日本語教室						
	取組の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生のための「プラットフォーム」となる日本語教室のあり方の検討 ・リアリティある日本語によるコミュニケーション能力の向上 ・一般市民の日本語教室への参加 ・生活に即したトピックや内容、また学習者自身が社会の一員として社会参加や自己実現が可能なテーマでの日本語教室の実施 ・一般市民・ボランティアへの多文化共生・国際理解の促進 						
	取組の内容	<p>「支援に役立つ日本語教室」では、具体的に下記のような教室活動の展開を通じ、プラットフォームとなる日本語教室の運営の実現に取り組んだ。</p> <p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢化社会の中で、外国人住民が災害時や非常時に支援者となるような人材を育成する ・外国人市民の地域社会への所属感を醸成する <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地震に備えるための準備や避難の仕方、避難所生活について支援者になるための基礎知識を学ぶ ・日本赤十字社と連携をし、応急処置や避難所生活のことを行動・体験型で学ぶ ・外国人住民が災害時に支援者になるためのイメージづくり ・愛知県・岡崎市総合防災訓練等に参加をして、学習成果を外部の人に向け発信する 						
	空白地域を含む場合、空白地域での活動	—						
	<input type="checkbox"/> 取組による体制整備	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生の「プラットフォーム(基盤)」としての日本語教室の運営の実施を行う ・日本語教育を通じた、外国人住民の社会的なエンパワメントを目指す 						
	取組による日本語能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に密着した、暮らしに役立つ日本語の習得 ・学習者自身が社会の一員として社会参加や自己実現ができるような日本語能力の向上 ・防災や医療など専門知識や専門用語が必要なテーマの場合は、スキルアップや日本語での知識習得も目的とする 						
	参加対象者	外国人市民	参加者数 (内 外国人数)					23人 (23人)
	広報及び募集方法	岡崎市広報に掲載、りぶら国際センターに募集チラシ掲載、HP/SNSによる広報 等						
	開催時間数	総時間 33時間(空白地域 時間)	1回	3時間	×	11回		
	主な連携・協働先	岡崎市防災危機管理課、日本赤十字社、既存の日本語教室、他地域の日本語教室、NPO 等						
開催場所	岡崎市図書館交流プラザりぶら 等							
参加者の出身・国別内訳 (人数)	中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
	4人	2人			4人	1人		6人
・フランス(1人)・イスラエル(1人)・アルゼンチン(1人)・ペルー(3人)								

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成28年6月5日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザりぶら102会議室	11	自己紹介・レベルチェック・防災バッグ	全体のオリエンテーションとCan-do-statementsを活用した自己評価チェックリストの回答をベースにレベル分けを行った。自己紹介の後、防災バッグについてカードなどを用いながら、自分にとって必要な物は何かを考えた。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵 内山喜代成	鈴木美帆
2	平成28年6月12日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザりぶら102会議室	15	事前学習①避難の仕方、応急処置	災害発生時の様子を映像を活用して学習し、避難所がどんなところかを学んだ。また、第4回目の日本赤十字社による講座の事前学習として、応急処置の基礎を学び、実際に布を切って三角巾を制作した。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵	鈴木美帆
3	平成28年6月19日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザりぶら102会議室	8	事前学習②避難所生活	災害時や避難所でよく使われることばを確認し、避難所のルールやマナーについて学んだ。その上で、避難所での生活で気をつけることや、大切なことは何かを考え、自分たちができることを話し合った。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵	鈴木美帆
4	平成28年6月26日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザりぶら102会議室	7	ワークショップ: 赤十字	日本赤十字社 愛知県支部と岡崎奉仕団によるワークショップで、地震が起きた時に気をつけることや、応急処置などを実践しながら学んだ。タンカーの使い方や毛布を活用してガウンをつくるなど、体験しながら学習を行った。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆 佐藤大悟

5	平成28年7月3日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102会議室	5	準備①ポイントまとめ、グループ分け	①防災バック、②応急処置、③避難所の3つのグループに分かれ、第4回目の日本赤十字社のワークショップの振り返りを行った。それぞれのグループで、大切だと思ったことや、人に伝えたいポイントについて話し合った。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵	鈴木美帆 佐藤大悟
6	平成28年7月10日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102会議室	12	準備②内容の検討	前回に続き今まで学んだことをまとめ、教室内や総合防災訓練で発表するために、グループごとに発表の準備を行った。最後に途中経過を報告し合っ、他のグループにアドバイスや感想、意見を伝えあった。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
7	平成28年7月17日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102会議室	8	準備③発表の練習	第5回、6回目で話し合ってきた内容をまとめ、発表の最終調整を行った。前回の他のグループからのアドバイスを受けて、ポイントを模造紙に書き出したり、絵や多言語での表示を使った掲示物などを作成した。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵 内山喜代成	鈴木美帆
8	平成28年7月24日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102会議室	11	学習者による発表	教室に参加していない外国人市民や日本人市民を教室に招き、学習の結果を発表した。①防災バック、②応急処置、③避難所の順に発表し、質問や疑問に思ったこと、もっと聞きたいことなどを話し合い、学習を深めた。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵 内山喜代成	鈴木美帆
9	平成28年7月31日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市図書館交流プラザ りぶら102会議室	7	全体まとめ	前回の発表の様子を撮影したビデオを見ながら、グループごとに振り返りを行った。その後、また、準備で大変だったこと、工夫をしたことを話し合った。最後に、教室全体を通して、できるようになったことを振り返った。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵 内山喜代成	鈴木美帆
10	平成28年8月28日 (日) 8:00~12:00	3	岡崎市中央総合公園	5	愛知県・岡崎市総合防災訓練への参加	愛知県・岡崎市総合防災訓練で、愛知防災リーダー育成支援ネットと協働してブースを出展した。第8回目の発表で使用した成果物などを展示し、来場者に学習者自身が日本語教室で学んだことを説明した。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵	鈴木美帆
11	平成28年9月11日 (日) 10:00~12:00	3	岡崎市中央総合公園	3	防災交流会への参加	岡崎ブラジル協会、岡崎中国人協会、岡崎フィリピンコミュニティが共催で行った防災交流会に参加をした。日本赤十字社による応急処置の説明の際、学習者が母語や、やさしい日本語で説明し、教室での学びを生かして活動した。	-	-

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

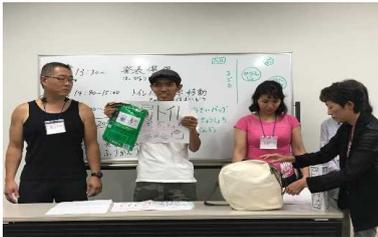
○取組事例①

【第4回、第11回 平成28年6月26日(日)、平成28年9月11日(日)】他団体との連携
防災に関する実際に使える知識の習得と、学習者が日本語教室で学んだことを実践できる場をつくることを目的に、積極的に他団体との連携を行った。第4回目では、日本赤十字社によるワークショップで、応急処置や避難所で気をつけたいことなどを学んだ。事前学習として基礎知識を学んでからワークショップに参加したことで、学習者の理解がより深まったようだった。初めて参加する日本語パートナーが三角巾の使い方が分からず困っていると、学習者が日本語で説明する場面も見られ、外国人市民と日本人市民が共に学び合う場になっていた。また、第11回目では、岡崎ブラジル協会・岡崎中国人協会・岡崎フィリピンコミュニティが共催で開催した防災交流会に参加をした。今まで、外国人コミュニティが中心となって防災イベントを開催したことはなかったが、支援に役立つ日本語教室の取組をより多くの人に知ってほしいという岡崎ブラジル協会のメンバーの声かけにより開催された。こちらでも日本赤十字社による講座があり、支援に役立つ日本語教室に参加をした学習者が母語ややさしい日本語で外国人市民に説明をしていた。外国人市民も日本人市民もみんなが一緒に、毛布を使って怪我人に見立てた人形を運んだり、バンダナを使った止血方法など、実践しながら応急処置のことを学んだ。



○取組事例②

【第8回、第10回 平成28年7月24日(日)、平成28年8月28日(日)】学習成果の発信
支援に役立つ日本語教室での学習成果を積極的に外部へ発信するため、第8回目では教室に参加していない人を招き、これまで学んできたことについて発表する機会を設けた。防災バッグ・応急処置・避難所の3グループに分かれ、大切なことや伝えたい事を様々な方法で発表した。防災バッグのグループは、防災バッグの中に入れておく役に立つ防災グッズを紹介した。イラストと物の名前を多言語で書いた紙を使い、外国人にも分かりやすくなるような工夫をしていた。応急処置のグループでは、なぜ応急処置を行うのかということ、イラストや分かりやすい日本語で説明した。また、三角巾を使った止血の方法を実演しながら説明していた。最後の避難所のグループでは、避難所でのルールやマナーをご飯の時、寝る時など場面ごとにまとめ、それぞれの場面で注意すべきことなどを発表した。また、第10回目は、愛知県・岡崎市総合防災訓練にブース出展をして、第8回目の発表資料を展示するとともに、来場者に学習者が学んだ内容を説明した。来場者からは「外国人がこんなに熱心に防災のことを勉強していることを初めて知った」「自分たちでもできることがあると、外国人が学んでいることは良いことだと思った」などの意見をいただいた。



(2) 目標の達成状況・成果

日本赤十字社による講座や、愛知県・岡崎市総合防災訓練への参加など、実践的な活動を積極的にプログラムに取り入れ、学習者が支援者として活動するイメージを具体的に持ち、専門知識や日本語能力の向上につなげることができた。特に愛知県・岡崎市総合防災訓練に参加できたことは、学習者にとって大きな学びとなった。地域のボランティア団体などに、防災に関心を持っている外国人市民がいることを知ってもらえた一方で、普段は接点を持ちにくい地域で防災に取り組む団体や自治会の活動を学習者が知ることができたことは、よかったと感じている。総合防災訓練の終了後には、学習者から「もっと地域に関わっていききたい」という声があり、地域の防災ボランティアや自治体とつながり、実際に活動していく場をつくっていく必要性を感じた。

また、支援に役立つ日本語教室をきっかけに、岡崎市の3つの外国人コミュニティ共催の防災交流会が開催されるなど、教室の外の活動に発展できたことも今年度の成果であった。当日本語教室で災害時・緊急時の専門知識を学ぶ外国人住民の姿を外部に発信することで、周りの外国人住民も災害時に何ができるのか考え、必要な備えをしようとする動きにつながったと考えられる。

(3) 今後の改善点について

防災に高い関心を持つ外国人市民を、地域で活躍できる人材として育成する重要性を改めて認識することができたが、具体的にどのように地域につなげていくかは課題であると感じた。これまでは、行政や日本赤十字社と連携した授業を行ってきたが、今後は地域の防災ボランティアや自治会を巻き込んだ取組を行って顔の見える関係をつくっていききたいと思う。お互いが存在を知っていて、何ができて・何ができないのかを共有しておくことで、万が一の災害時にも機能する関係になることが可能だと考える。

<取組2-2>

取組2-2

取組の名称	暮らしに役立つ実践型の日本語教室② 生活に役立つよみかき教室							
取組の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生のための「プラットフォーム」となる日本語教室のあり方の検討 ・リアリティある日本語によるコミュニケーション能力の向上 ・一般市民の日本語教室への参加 ・生活に即したトピックや内容、また学習者自身が社会の一員として社会参加や自己実現が可能なテーマでの日本語教室の実施 ・一般市民・ボランティアへの多文化共生・国際理解の促進 							
取組の内容	<p>「生活に役立つよみかき教室」では、具体的に下記のような教室活動の展開を通じ、プラットフォームとなる日本語教室の運営の実現に取り組んだ。</p> <p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活に役立つ読み書き能力を育成する ・学習者の社会的なエンパワメント <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作文、映像作品の制作を通して日本語で自己表現を行う ・学習者の想いや意見を社会に発信する 							
空白地域を含む場合、空白地域での活動	—							
取組による体制整備	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生の「プラットフォーム(基盤)」としての日本語教室の運営の実施を行う ・日本語教育を通じた、外国人住民の社会的なエンパワメントを目指す 							
取組による日本語能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語の「読む」「書く」の能力向上 ・学習者自身が社会の一員として社会参加や自己実現ができるような日本語能力の向上 							
参加対象者	外国人市民	参加者数 (内 外国人数)	17人 (17人)					
広報及び募集方法	岡崎市広報に掲載、りぶら国際センターに募集チラシ掲載、HP/SNSによる広報 等							
開催時間数	総時間 23時間(空白地域 時間)	1回 2時間 × 10回、	3時間 × 1回					
主な連携・協働先	岡崎市、既存の日本語教室、他地域の日本語教室、NPO 等							
開催場所	岡崎市図書館交流プラザりぶら 等							
参加者の出身・国別内訳 (人数)	中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
	3人	4人						7人
ペルー(1人)、フランス(2人)								

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成28年8月28日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	10	自己紹介・レベル チェック	自己紹介をレベルチェックを行った。その後、オリエンテーションを行った。今回取り扱うDSTとはどのようなものかを知ってもらうため、実際に他地域で外国人が作成した映像の上映を行った。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵	鈴木美帆
2	平成28年9月4日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	8	テーマ決め、マインド マップ	まず、各自でDST作品のテーマを決めた。その後、マインドマップを作成しながら、作品の内容を考えた。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
3	平成28年9月18日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	7	短い文を書こう	マインドマップ作成の続きを行った。その後、作品で使用する文章づくりを行った。今回は、マインドマップに書き出した単語を使用し、短い文を作成した。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
4	平成28年9月25日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	4	文をつなげよう①	前回に引き続き、作品で使用する文章作りを行った。短い文をどのような順番で発表したいか、またどのような順番なら分かりやすいかを考えた。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
5	平成28年10月2日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	5	文をつなげよう②	引き続き、文章作成を行った。短い文をつなげ、文章にしてみた。その後、作成した文を読む練習を行った。	菅沼国雄 森下裕介 田中千恵 内山喜代成	—

6	平成28年10月9日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	4	文を完成させて、読む練習をしましょう	次回の準備として保存フォルダを作成し、『各自で持ってきた写真を保存。その後、作品の文章作りをパートナーと会話しながら行った。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
7	平成28年10月23日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	4	映像編集①	文章が完成した人から録音作業に移る。パートナーと一緒に読む練習を行い、録音室に移動しボイスレコーダーに録音した。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
8	平成28年10月30日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	4	映像編集②	パソコンで映像を作成する。ムービーメーカーを使用し、写真と音声を合わせる。その後、音量の調整やタイトルの挿入などを行った。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆 佐藤大悟
9	平成28年11月6日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	5	発表の練習	発表に向け、作品制作の続きを行う。完成した人は、パートナーなどに作品を見せ、感想を聞いた。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
10	平成28年11月13日 (日)13:00~16:00	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	3	市民向け発表会	市民向けに発表会を行った。学習者に作品紹介などをしてもらい、作品を上映した。その後、交流会を行い、学習者と市民と会話をする時間を設けた。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
11	平成28年11月20日 (日)13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	3	全体まとめ	発表会の時に参加者に書いてもらった感想を読み、今回の活動がどうだったかを振り返った。その後、作品作りを通して、自分でできた事、できなかった事、できるようにしたい事を話した。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第8回 平成28年10月30日(日)】

映像作品の制作の最終ステップとして、パソコンを使用しながら映像編集を行った。まず、各自で持ってきた写真を見ながら、日本語パートナーと、どの写真を使うのか話し合ったり、文章の中にこんな写真があると良いのでは、などの話をした。その後、録音まで完了した学習者から、写真と音声のデータをパソコンに取り入れ、音声の内容と写真が合うように編集ソフトを使って調整した。パソコンが得意ではない学習者や日本語パートナーもいるため、映像編集をサポートをする専門家も入れて編集を進めていった。最後に、映像が完成した学習者は、発表に向けて自己紹介・作品紹介の文を考えた。



○取組事例②

【第11回 平成28年11月13日(日)】

日本語教室を実施している施設「岡崎市図書館交流プラザりぶら」の全館をあげての年1回のイベントである「りぶらまつり2016」の中で、市民向け発表会を行った。発表会に、今まで日本語パートナーとして関わったボランティア、他の地域で日本語教室の活動を行っている人や、普段は日本語教室に関わりのない一般市民など37名が参加をした。

まず最初に、作成した学習者から自分自身のことや作品の内容について簡単に説明をして、学習者のバックグラウンドやテーマ設定をした背景を話してもらった。それから作品を上映し、参加者から学習者へコメントや質問がされた。また、全ての作品の上映後には、参加者全員を3つのグループに分け、少人数で対話を深め、交流の持てる時間も設けた。



(2) 目標の達成状況・成果

日本語の四技能の中で「読む」「書く」を苦手とする学習者が多かったが、デジタル・ストーリーテリングを活用した作品づくりを通して、学習者の自己表現の場づくりと社会的なエンパワメントに寄与することができたと感じている。特に、学習者が自分の日本語に自信が持て、日本語を積極的に使うようになるなど、目に見える変化があったことは大きな成果だった。緊張しやすく、人前での発表時には体調が悪くなってしまうような学習者も、「しっかり準備をしたものだから自分で発表できる」と上映会で堂々と発表を行っていた。教室の中で日本語パートナーと対話を交わし、試行錯誤をして自分の想いを日本語で語り、文章にまとめていくプロセスを踏むことは大変な作業だったが、確実に学習者の自信に繋がっていったようだ。また、日本語パートナーをした日本人が、学習者のバックグラウンドや考え方を知らないいい機会にもなった。日本語で表現できないだけで、外国人が多く知識や経験があることを知り、お互いに興味を持って語り合う場を教室内や上映会後の交流会でつくることができた。

(3) 今後の改善点について

読み書きを苦手とする学習者が多く、全体を通して参加者が少なかった点は非常に残念だった。傾向として、中国人やアジア圏の学習者はあまり抵抗がなかったようだが、ブラジル人などの学習者は回数を重ねて文章を書いていくスタイルに抵抗を感じる人が多かったように思う。読み書きのスキルアップができるという点だけでなく、今年度見えてきたポイントを参加者募集の際にしっかり伝え、興味を持ってもらう工夫をしたいと思った。

もう一つの課題として、授業が進むにつれて、それぞれの学習者の進捗が違ってくることで、個別作業が多くなって限られた日本語パートナーと学習者での作業になってしまった点だ。個別になることで、他の参加者との接点がありません、継続参加のモチベーション低下してしまう学習者がいた。特に読み書きが苦手な学習者ほど、その傾向が強かった。「読む」「書く」の活動に重点は置きながら、対話やグループでの共有など「話す」「聞く」の活動を入れてメリハリを持たせ、読み書きが苦手な学習者でもモチベーションが保てるプログラム作りの必要性を感じた。

<取組2-3>

取組2-3	取組の名称	暮らしに役立つ実践型の日本語教室③ 病院に役立つ読み書き教室							
	取組の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生のための「プラットフォーム」となる日本語教室のあり方の検討 ・リアリティある日本語によるコミュニケーション能力の向上 ・一般市民の日本語教室への参加 ・生活に即したトピックや内容、また学習者自身が社会の一員として社会参加や自己実現が可能なテーマでの日本語教室の実施 ・一般市民・ボランティアへの多文化共生・国際理解の促進 							
	取組の内容	<p>「病院に役立つ日本語教室」では、具体的に下記のような教室活動の展開を通じ、プラットフォームとなる日本語教室の運営の実現に取り組んだ。</p> <p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国人住民の実生活につながる日本語と生活知識を学ぶことで、日本社会でできることを増やす ・特にニーズの高い病院にテーマを絞り、外国人住民の抱える疑問や不安などを解消する <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の病院に関する言葉や知識を身に着ける ・岡崎市民病院へ見学に行き、実際の病院の雰囲気や病院で見かける日本語などを学ぶ 							
	空白地域を含む場合、空白地域での活動	—							
	取組による体制整備	<input type="checkbox"/> <ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生の「プラットフォーム（基盤）」としての日本語教室の運営の実施を行う ・日本語教育を通じた、外国人住民の社会的なエンパワメントを目指す 							
	取組による日本語能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に密着した、暮らしに役立つ日本語の習得 ・日本の病院に関する言葉や知識の習得 							
	参加対象者	外国人市民	参加者数 (内 外国人数)					32人 (32人)	
	広報及び募集方法	岡崎市広報に掲載、りぶら国際センターに募集チラシ掲載、HP/SNSによる広報 等							
	開催時間数	総時間 9時間(空白地域 時間)	1回	2時間	×	3回、	3時間	×	1回
	主な連携・協働先	岡崎市、岡崎市民病院、名鉄バス、既存の日本語教室、他地域の日本語教室、NPO 等							
開催場所	岡崎市図書館交流プラザりぶら 等								
参加者の出身・国別内訳 (人数)	中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル	
	3人	1人			5人			13人	
ペルー(4人) フランス(1人) ロシア(1人) ウクライナ(2人) モルドバ(1人) イスラエル(1人)									

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成29年2月12日 (日) 13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	26	病院で使える日本語を学ぼう	始めにオリエンテーションを行い、その後病院の流れについてグループで話し合う。また、病院でよく使われる言葉「保険証」などの意味を確認し	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
2	平成29年2月19日 (日) 13:30~16:30	3	岡崎市民病院	19	市民病院を見学しよう	実際に岡崎市民病院へ見学へ行く。病院内では、グループに分かれ、それぞれ気になるところをパートナーと話し合った。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆
3	平成29年2月26日 (日) 13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	10	病院で診察が受けられるようにしよう	市民病院を見学したことについて振り返る。その後、市民病院を利用する際に注意することなどを確認する。最後に問診票について確認した。	菅沼国雄 田中千恵 内山喜代成	—
4	平成29年3月5日 (日) 13:30~15:30	2	岡崎市図書館交流プラザ りぶら	12	薬の飲み方(使い方)、ふりかえり	薬の飲み方(使い方)について、実際に薬の入っていた袋を見ながら話し合った。その後、今回の教室を通して学んだことなどを振り返った。	菅沼国雄 森下裕介	鈴木美帆

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第2回 平成29年年2月19日(日)】

外国人住民に実際の病院の雰囲気などを知ってもらうため、岡崎市民病院へ見学に行った。市民病院へは路線バスを使用し、車を持たない外国人住民でも市民病院へ行けるように、降りるバス停や乗車料金の支払い方などを実際に体験しながら学んだ。病院へ到着後、日本語パートナーと学習者でグループを作成。指導者が先頭を歩き「受付」「待合室」などを案内し、各場所で気になったことなどをグループで話した。また、大切だと思った言葉などをワークシートにメモをした。



○取組事例②

【第4回 平成29年3月5日(日)】

薬の飲み方(使い方)と今回の教室でこれまで学んできたことの振り返りを行った。まず、前回の復習として学んだ内容で大切だと思うことをグループで話し合った。前回欠席者も参加していたため、内容を共有することができた。その後、薬の飲み方(使い方)について薬の袋を見ながら学習した。「食前・食後」や「一日一回」など薬を飲むタイミングや回数を書いてある場所をパートナーと確認した。最後に、今回の教室で大切だと思ったこと、もっと勉強したいと思ったことをグループで話し合った。その後、グループで話し合った内容を全体で共有した。



(2) 目標の達成状況・成果

今年度開催した日本語教室の中で一番多い参加があり、4回という少ない回数の中でも途中で友人を連れてくる学習者がいるなど、改めて「病院」は外国人住民の関心の高いテーマであると感じた。むずかしい漢字やことばが出てきても、非常に意欲的に学習している姿が見られた。

(3) 今後の改善点について

今回の教室では、学習者が多く参加し、日本語パートナーの数が足りない状態が続いたため、日本語パートナーに多くの負担がかかってしまった。このことから、今後、教室に参加してくれる日本語パートナーを確保するための活動が必要だと感じた。また、市民病院へ見学に行った次の教室で学習者が減少してしまった。この原因として考えられることとして、①病院を見学して満足してしまった、②見学終了後流れ解散にしてしまった為次回の教室について周知できなかった(コースが終了したと勘違いしてしまった)などが考えられる。そのため、今後の対策としてコースの始めに教室の予定を知らせる、各回の終了後に次回のお知らせを伝える、などの対策が必要なのではないかと感じた。

<取組3>

取組3	取組の名称		Vivaつながるセミナー						
	取組の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・地域と事業が「つながる」優良事例を知り、外国人市民と日本人市民がともに地域参加できる環境づくりのために日本語教室が地域で果たすべき役割について考える ・他分野(まちづくり、アート等)の地域連携の事例を知り、日本語教育に活かす ・既存の支援の資質向上と広域的なネットワーキング 						
	取組の内容		<p>外国人市民の社会参加や自己実現を目指した地域との「協働」や「つながり」を意識したセミナーを開催する。</p> <p>①「まちづくりから学ぼう★日本語教室と地域のつなぎ方」 多様な人が暮らす街で市民参加型まちづくりを支援してきた講師の経験・事例を学び、日本語教室と地域がつながるヒントを得る。 ・2時間×1回 ・外部講師:天野裕(NPO法人岡崎まち育てセンター・りた)</p> <p>②「日本語教育と地域のつながりを生むプログラムデザイン」 日本語教室がどのように外国人の社会参加に寄与できる存在になっていくか、アートやまちづくりの事例か考え、ワークショップでそのノウハウを自分たちの取組にどう反映するか検討する。 ・4時間×1回 ・外部講師:中脇健児氏(場とコトLAB)</p>						
		空白地域を含む場合、空白地域での活動	—						
		取組による体制整備	<ul style="list-style-type: none"> ・他地域や他団体の優良事例を知ることで、多文化共生に資する日本語教室の質を高める。 ・周辺の同じような課題や取組を行う団体とつながりを持ち、今後の取組の改善向上に取り組む 						
		取組による日本語能力の向上	—						
		参加対象者	日本語教育や多文化共生、まちづくりに関心のある市民	参加者数 (内 外国人数)	39人 (0人)				
		広報及び募集方法	既に日本語教育や多文化共生、まちづくりに取り組んでいる団体へ直接声掛け 等						
		開催時間数	総時間	時間(空白地域	時間				
		主な連携・協働先	岡崎市役所、既存の日本語教室、近隣の日本語教室 等						
	開催場所	連尺学区市民ホーム、岡崎市図書館交流プラザりぶら							
	参加者の出身・国別内訳 (人数)	中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
		日本(39人)							

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成28年10月30日 (日)9:30~11:30	2	連尺学区市民ホーム	21	まちづくりから学ぼう ★日本語教室と地域のつなぎ方	周りの共感を集め、行政や地域住民を巻き込んでいく方法を、講師の天野氏が岡崎市で取り組んできた具体的な事例を元に説明いただいた。最後に感想を共有し、日本語教室で取り組めそうなポイントを話し合った。	天野裕	森下裕介
2	平成28年12月11日 (日)13:30~17:30	4	岡崎市図書館交流プラザりぶら	18	日本語教育と地域のつながりを生むプログラムデザイン	地域を巻き込んだまちづくりの事例の紹介いただき、連携するコツなどを学んだ。つながりを生むステップの作り方や魅力的な事業のポイントなどを講義とワークを交互に行う形式で説明いただき、最後にグループごとに考えたアイデアを発表した。	中脇健児	森下裕介

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第1回 平成28年10月30日(日)】

日本語教室と地域のつなぎ方を考えるために、岡崎市でまちづくりの活動している「NPO法人岡崎まち育てセンター・りた」の天野裕氏を講師に招き、セミナーを行った。自己紹介ワークで接点の作り方や、新たに取り組むはじめていく際、どのように共感を生み、周りの協力を得ていくかを具体的に紹介いただいた。最後に、天野氏の話聞いて、日本語教室にはどのように活かしたらよいか、話を聞いた感想などをグループで話し合いを行い、全体で共有した。参加者の感想としては、「協働先の巻き込み方として、“してもら・動いてもらう”ではなく“一緒に動く仲間”にしていくことが大切だと感じた」や「外国人支援ではなく、外国の人達の自発的な活動を掘り起こすことが重要だと思った」などの意見があり、外国人住民と対等に向き合い協働していく上で、重要な気づきがあった。



○取組事例②

【第2回 平成28年12月11日(日)】

関西を中心にまちづくりを行っている「場とコトLAB」の中脇健児氏を講師に招き、まちづくりの観点から、日本語教室と地域をつなげるにはどうすればよいかを考えた。中脇氏の関わっている事例を紹介いただきながら、つながりを生むステップの作り方や参加したくなる活動のポイントなどを講義とワークを交互に行い、事例を学ぶだけでなく、体験的に学んでいった。最後には、グループごとにやりたい事を一つ決め、悩みの種を解決できるような活動を考え発表した。参加者からは「まちづくりの事例が面白く、非常に参考になった。日本人も外国人も楽しめるような”つながり”を考えていきたいと思った。」や「できない、よくない、足りないと思っていることは、視点を変えれば見えるものがあるのだと思った。」という意見があった。悩みの種と向き合いながら、発想を転換して、やりたい事を実現していく方法を学ぶことができた。



(2) 目標の達成状況・成果

外国人市民の社会参加や自己実現を目指して地域との「協働」や「つながり」をつくる視点を学ぶためにセミナーを開催したが、39名と多くの参加者がいたことは成果であった。教室内だけの活動だけでなく、活動を広げていきたいと考えている参加者の多くが、地域との「協働」・「つながる」というキーワードに興味を持ってもらったようで、外国人市民の社会参加や自己実現を目指した活動について考える機会にできたと感じている。セミナーという形にすることで単発での参加ができることで、今まで当団体に関わりのない市民や、市外や県外から地域の枠を越えて多様な参加があった。セミナーを通して地域につながる日本語教育について考えを広め、想いを共有できる団体・地域と広域的なネットワークをつくることができた。昨年度に引き続き、日本語教育とまちづくり等の他分野との連携や、新しい発想で日本語教育を捉えなおす機会をつくれたことも成果だった。

(3) 今後の改善点について

日本語教育と地域との「協働」・「つながり」を生むためには、多様な住民を巻き込む「まちづくり」のノウハウが活用できると考えたが、日本語教育への活かし方を考えるステップを加えてほしいという要望があった。単発セミナーでは時間が限られているため、講師からの事例紹介が中心になってしまうが、今後は日本語教育での活用を考えるための連続講座を開催するなど、ある程度の時間をかけて考える機会を設けることも必要だと感じた。

<取組4>

取組4	取組の名称		「つながる」日本語教育の情報発信及びツールの作成						
	取組の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・本事業の成果報告を行い、外国人市民の地域参加の重要性を伝える ・日本語教室を起点とした多文化共生のための地域づくりについての理解促進 						
	取組の内容		<p>愛知県東部地域には「生活者としての外国人」の日本語能力向上という観点に基づく日本語学習支援を行う日本語教室がなく、まだまだ外国人市民の地域参加の重要性が理解されにくい状況である。また、まちづくりや教室の魅力発信という視点で、教育の指導以外の活動に精力的に取り組む団体はあまりない。そこで、本事業の取組の成果を発信することで、日本語教室を起点とした多文化共生のための地域づくりについての理解促進と、地域日本語教室の価値向上に取り組む。</p> <p>①成果報告会の実施 ・本事業のねらいと成果を日本人市民も外国人市民も含めた一般向けに報告する機会をつくる ・時間:4時間×1回</p> <p>②取組についての冊子作製 ・岡崎市での取組を冊子にまとめ(1000部印刷)、関係機関に配布する ・一般市民向けにも配布及び公開をする</p> <p>③ブログ及びSNS、記録映像を活用した外部への情報発信 ・ブログ及びSNSを活用して、取組の内容をタイムリーに広域に情報発信していく ・映像で記録を残し、本取組の様子をリアルに伝える (団体ブログ、facebookページ、新聞掲載)</p>						
	空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	取組による体制整備 <input type="checkbox"/>		<ul style="list-style-type: none"> ・一般市民への日本語教育や外国人住民の地域参加の重要性についての理解促進を行う ・本事業の成果を踏まえて、今後の日本語教育の体制整備に活用する要素を共有する 						
	取組による日本語能力の向上		—						
	参加対象者		一般市民、行政関係者、日本語教育関係者、学生 等	参加者数 (内 外国人数)		42人 (1人)			
	広報及び募集方法		岡崎市広報誌にチラシ掲載、当団体HP/SNSでの募、近隣地域の関係者へ声掛け 等						
	開催時間数		総時間 3時間(空白地域 時間)	1回	3時間 × 1回				
	主な連携・協働先		岡崎市役所、既存の日本語教室、他地域の日本語教室、NPO、大学 等						
開催場所		東部地域交流センターむらさきかん 等							
参加者の出身・国別内訳 (人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
		1名							
		日本(41人)							

実施内容

回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	2017年1月22日 (日) 14:30~17:30	3	東部地域交流センターむらさきかん	42	日本語教室の可能性を広げよう～「つながる」から「ひろがる」へ～	①事業報告で、本事業の取組内容や成果を報告し、②ポスターセッションで地域につながる日本語教室や取組を行っている団体に発表いただき、最後に③ワークショップとして、参加者から出た悩みについて話し、何をどんな取組をできるか話し合った。	—	森下裕介 鈴木美帆

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【事業報告、ポスターセッション】

最初に取組1～3の成果報告を行った。資料により報告に加え、愛知産業大学の学生に協力してもらって作成した映像による活動記録を上映した。その後、地域につながる日本語教育を行っている団体によるポスターセッションを行った。今回は愛知県だけではなく、岐阜県や静岡県の団体を含め全部で9団体に参加いただいた。



○取組事例②

【ワークショップ】

今回の報告会やポスターセッション、普段の活動を通して感じていることから話したいテーマを参加者から募集し、参加者同士で話し合うワークショップを行った。①外国人向けの情報発信、②学校の勉強をどう教えたらいいのか、③日本語教育の担い手の探し方の3つのテーマが出され、それぞれ興味のあるグループに分かれて話し合いを行い、最後にそれぞれのグループで出された意見やアイデアを共有した。参加者からは「今まで気づけなかったけれど、できることがあると気づけた」という意見や「地域や活動分野が違う団体でも共通する悩みが多く、非常に参考になった」という声があった。



(2) 目標の達成状況・成果

「生活者としての外国人」の日本語能力向上という観点に基づく日本語教育と、外国人市民の地域参加の重要性を発信するため、①成果報告会、②取組についての冊子作製、③ブログ及びSNS、記録映像を活用した外部への情報発信を行い、当団体の目指す「つながる」日本語教育について共感してくれる団体と、愛知県だけでなく、地域の枠を越えてつながることができた。また、外部への情報発信を積極的に行うことで、当団体の取組に関心を持ってもらう市民が増え、取組1や取組3への参加者を多く集めることができた。

(3) 今後の改善点について

取組についての冊子を制作し、「多文化共生のプラットフォームとしての日本語教育の体制整備」としての取組をより理解してもらう資料はできたが、配布をするだけになってしまった。外国人住民と日本人住民がともに地域参加できる環境づくりのための日本語教育に取組む人材を増やすため、冊子を活用したワークショップを開催するなど、より理解を深めてもらう取組も同時に行うことが必要だと考える。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

日本語教室からの多文化共生のための地域づくりを目指す。また、外国人住民と日本人住民がともに地域参加できる環境づくりのための日本語教育体制整備事業を行う。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

①日本語教育の担い手育成

- ・日本語パートナー養成講座を通して、Vivaおかざき！！が目指す日本語教育について伝える機会をつくれた
- ・去年に引き続き、日本語教育に興味を持つ多くの人に参加をしてもらえた
(養成講座:異なり数26名、日本語パートナー:41名、セミナー参加者:39名、報告会:42名)

②「つながる」日本語教育の情報発信

- ・総合防災訓練の参加、3つの外国人コミュニティ共催の防災交流会、市民向け上映会の開催など、教室の外の活動にもつながった
- ・成果報告会で、愛知県内だけでなく、岐阜県・静岡県9団体によるポスターセッションを通して「つながる」日本語教育について検討できた
- ・Vivaおかざき！！の行っている日本語教育事業をまとめ、全体像を示す冊子の作成ができた

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果等

①岡崎市防災危機管理課、日本赤十字社

岡崎市防災危機管理課には運営委員として、日本赤十字社には日本語教室で講座をやっていただくなど、外国人市民が専門的な知識を学ぶとともに、外国人市民の困りごとや外国人市民でもできることを知ってもらう機会とできた。

②外国人コミュニティ

岡崎ブラジル協会、岡崎中国人協会、岡崎フィリピンコミュニティに運営委員として全事業に外国人の視点からアドバイスをもらいつつ、日本語教室での学びを生かした教室外の活動と一緒に行うことができた。

③まちづくり

取組3Vivaつながるセミナーで、岡崎市でまちづくりを行うNPO法人まち育てセンター・りたの天野氏や、関西を中心にまちづくりを行う中脇氏に来ていただき、地域を巻き込む仕掛けづくりのアドバイスをいただいた。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

①SNS(団体ブログ、Facebook)の活用

- ・日本語教育事業関係のブログ掲載数:55件
- ・facebookページ数:4つ(生活に役立つ日本語教室、生活に役立つよみかき教室
支援に役立つ日本語教室、病院に役立つ日本語教室)

②新聞掲載

- ・中日新聞 愛知県内版(平成28年6月6日「日本語パートナー養成講座、平成29年1月25日「成果報告会」)

③映像による記録制作

- ・愛知産業大学の学生に協力を依頼し、写真と映像を組み合わせ取組1~4の活動を記録した紹介映像を作成した

④日本語教育事業の紹介冊子

- ・取組をまとめた冊子を作成し、多文化共生につながる日本語教育の可能性を周知するために関係者に配布した

(6) 改善点、今後の課題について

①日本語教育の担い手育成

- ・養成講座が終了後に参加してくる日本語パートナーへのオリエンテーションやフォロー方法
- ・日本語パートナーが目前の学習者へのフォローはできていたが、他の学習者との学びの共有を意識してもらう必要性を感じた。
来年度以降からは、グループでの共有をサポートする役割をする日本語パートナー「グループリーダー(仮)」を設定したい。

(7) その他参考資料